

る。

② 自閉児の言語に関する研究：言語発達の種類に関するもの（蔭山，丸井，神野，佐藤，生越，山田ら，1974，1975）や対人関係の発達と病理言語について（丸井，蔭山，都築，1976），言語症状の因子分析研究（内田，1976）など第3期に入ると，言語障害研究は飛躍的に進展したが，教育心理面では，長期的展望のもとに継続的に追求するもの，とくに教育現場の状況を反映して，自閉児，精神発達遅滞児や脳性マヒ児など重度化した障害児のコミュニケーション問題にその焦点があてられつつある。

6. 日本の人格心理学者の役割

伊藤隆二
（神戸大学）

いったい諸外国の人格心理学者たちは日本の心理学者に対し何を期待し，何を求めているのだろうか。1年間の米国における私の見聞から，それは日本の風土に根ざした日本人独自の研究の成果を諸外国にむけて発表していくことであることを知った。たとえば，森田正馬氏の「森田療法」，吉本伊信氏の「内観療法」，土居健郎氏の「『甘え』の構造」，角田忠信氏の「日本人の脳」，平井富雄氏の「禅の神経生理学」などはそれにこたえたものであろう。

諸外国の研究者は日本の伝統文化，日本人の自然観，人間観，とくに仏教思想に支えられた「もののあわれ」「わび」「さび」「いき」といった日本人の人格の基調をなすメカニズムの解明にのりだしている。C.S. Hall & G. Lindzey の“Theories of Personality”の第3版（1978）に“Eastern Psychology”という新しい章が登場したことで，諸外国の研究者の日本の人格心理学に対する期待はいっそう高くなるものと予想される。

では，日本の人格心理学者はいったい何をしてきたのだろうか。こうした諸外国の心理学者にこたえる研究に真剣にとり組んできたのだろうか。また，諸外国から人格心理学者たちが日本に勉学に来たときに，かれらの求めているものにこたえる研究成果が用意されているだろうか。

21世紀は「日本の世紀」となることが予想されている。おそらく欧米型の文化はゆきづまり，そして破綻したとき，世界中の人びとは救いと希望を「日本」に求めてくることだろう。物の豊かさと合理性という観点から欧米のものをすべてよしとする価値観にとらわれた人間形成から，論廻の思想を軸にすえた，質素ながらも心情の豊かな人間形成への方向転換がせまられている。

それにこたえるのが日本の人格心理学者の役割だと，私は確信している。

第4分科会 人間関係

——学校および家族の研究を中心として——
企画および司会

永 田 良 昭（学習院大学）
レビュアー 田 中 祐 次（信州大学）
“ 小 嶋 秀 夫（名古屋大学）
話題提供者 宮 脇 二 郎（岐阜大学）
“ 春 日 喬（お茶の水女子大学）
指定討論者 篠 原 し の ぶ（中村学園大学）
“ 長 田 雅 喜（名古屋大学）

この分科会では学校および家族の研究を中心とした教育における人間関係研究の問題が取り上げられた。

まず，田中は人間関係を通じての人格形成という田中自身の基本的な関心を視点にすえて，過去20年の学級における人間関係研究の整理と今後への展望を試みた。田中の論点はおおよそ次のようにまとめることが出来るように思われる。すなわち，(1) 過去20年の研究の流れをみると，戦後の民主主義導入期におけるLippitt, R. らの社会的風土の研究の紹介・移入等によって代表されるアメリカの社会心理学の導入の時期，いわゆる「人づくり教育」に対応した人間関係の操作，リーダーシップ論への関心に代表される高度経済成長の時期，第3に，オイル・ショックを契機とする人間性の回復，個の尊重の時期の3つに大別されること，(2) 高度経済成長期以後の「ひとりひとりの教育要求をその個性に応じて受け入れ，ひとりひとりを差別なく育てる教育」という理念が一般化した今日，研究者はこれに応えるために「学級づくりを通じてこの人間形成の過程を明らかにする」ことこそ責務であるにもかかわらず，必ずしもこれに応えていないこと，(3) 当面の問題としては集団参加の意義を明らかにするとともに，そのための方法としてアクション・リサーチが求められること，などである。

親子関係研究の整理と展望を試みた小嶋は，主として方法的反省という観点から報告を行った。ここでいう方法的反省は，単なる技術的な方法についての問題ではなく，親子関係を中心とした人間関係研究の基本的な視点にかかわる問題である。小嶋の論点は次のようにまとめられるように思われる。すなわち，(1) 親子関係研究においては，暗黙のうちに親の子どもに対する一方的な影響が仮定されていたのではないかとということ，(2) このことは，第1に人間関係を相互的な過程としてとらえるための視点と方法に欠けるととも

に、相互作用の帰結としての関係そのものの把握という人間関係の総合的な把握が十分でないこと、第2に親子の関係をその両者を取りまくさまざまな社会的関係と切りはなしたところでしかとらえていなかったという2つの問題の存在を意味するのではないかということである。

田中と小嶋の総括的な整理をうけて、まず宮脇からは自身の学級研究の経験をもとに、(1) 制度や学習指導要領という枠組のもとでその性格を規定されている学級の研究においては、その特殊性を十分に考慮に入れた視点が必要であり、(2) いわゆる実験社会心理学的な研究を基礎とした、諸外国、とくにアメリカの研究をそのまま移入することには問題があること、(3) 学級研究は教育目標を阻害することへの危惧などを理由として、必ずしも教育現場で受け入れられるとはかぎらずますます困難になりつつあること、が指摘された。

春日からは、(1) 自殺・他殺などの現象の低年齢化、家庭内暴力や校内集団暴力の多発、障害者に対する就学拒否など、教育の現場を含む種々の場面に現に生起している社会的事象の実態を把握することによって現在の状況を理解することの必要と、(2) 教育心理学的な見地からみたときに、子どもが人間、あるいは望ましい人間関係について学習する場がはたして現状においてどのように保証されているのかを明らかにすべきであり、(3) 散発的、部分的なかぎられた側面からの研究ではなく、従来の分析的研究の枠をこえた研究が必要ではないか、という指導がなされた。

以上の報告に対し、社会心理学の立場から長田は、社会心理学的な関心と教育心理学的な関心のちがいをミクロな視点とマクロな視点のちがいに対応させられるという指摘とともに、社会心理学的な研究が実践的な問題に一層関心を払うべき必要があるとの主張がのべられ、また篠原は、教育という側面からみたある条

件の効果または意義は必ずしも単純にとらえられず、類似の条件のもとにおかれた子どもでもその条件の影響はときには全く相反するかたちであらわれてくるという事実を教師の指導性の影響を例としてあげ、これらの問題をどのように考えるかが実践の場の問題として重要であることを指摘した。

以上は、司会者としての理解をもとに各論者の主たる論点を紹介したものであり、必ずしも妥当な理解とはいえないかもしれないが、これらの討論を通じて提起された問題は次のようにまとめることが出来るように思われる。すなわち

(1) 学級における教師と生徒、生徒と生徒の関係の研究においても、家族における人間関係の研究においても、そこにあらわれる関係を学級や家族を位置づけている社会的な背景を抜にして考察することには問題があること、

(2) 同様な意味で、これまでの学級や家族の研究は、学級や家族の実態を十分にとらえることに成功しているとはいえず、そこには問題への接近の仕方を含めた方法的な再検討が必要であること。

(3) 教育的実践という視点から行われる価値的評価が、ややもすれば従来は極めて便宜的、あるいは恣意的に行われ、あるいは、短期的に行われるきらいがあったことに対する慎重な吟味が必要であること、である。

最後に、この分科会は主催者の構想としては「社会・集団」というもっと広い範囲の研究を包括すべきものであったにもかかわらず企画者の責任において「人間関係」に焦点を当てることになったことをおこたわりしておかなければならない。「社会・集団」という範囲で取り上げるべき研究が見られないという意味ではなく、マス現象から教育組織や教員組織の問題も含めた多様な問題を共通する枠組のもとで討論するために必要な総合的な視点を企画者が持ち得なかったためである

(永田良昭 記)

Uchisugawa : There are few educational and psychological articles concerned with speech handicapped children except stuttering and communication disorders due to feeble-mindedness.

During the following ten years (1968-78), the variety and frequency of articles have increased year by year. However, in respect to the content of articles showing the up-to-date researches, the following two features have been closed up: the speech behavior of autistic children and the speech modification of the heavy feeble-minded from the viewpoint of operant conditioning.

Ito : For Japanese psychologists the expectation of the personality-researchers in foreign countries is not the follow-up studies of western psychological theories, but just our Japanese researchers' original studies based on the eastern psychology, I believe. Japanese psychologists should consider this point, and get to work on Japanese theory of personality from the viewpoint of Buddhism thoughts.

The 4th Section : Human Relations in the School and Family Setting

Organizer and chairman : Yoshiaki Nagata (Gakushuin University)

Speakers : Yuji Tanaka (Shinshu University)

Hideo Kojima (Nagoya University)

Jiro Miyawaki (Gifu University)

Takashi Kasuga (Ochanomizu University)

Discussants : Shinobu Shinohara (Nakamura Gakuen University)

Masayoshi Osada (Nagoya University)

The subject of this symposium was to review critically the recent trend of our Japanese studies on human relations in school and family setting.

First, it was pointed that in Japan there had been many prominent studies on classroom dynamics since World War II, stimulated by Lewinian studies on social climate and the trend of democratization of Japanese society. But it was pointed out that the impact of these studies on educational problems have been negligible because of the discrepancy between the practical educational concerns and researches.

Second, it was discussed that most studies on parent-child relationship failed to conceive parent-child relationship as a reciprocal process necessitating a methodological re-examination for researchers.

Here are some other points.

- (1) Both school and family settings have to be taken as a part of a particular society and the character or dynamic process of the teacher-pupil, pupil-pupil interaction and family relation have to be integrally related to various aspects of society.
- (2) Researchers must thoroughly study the actual social problems such as the increase of cases of suicide of young children and the prejudice to handicapped children both particular to the present educational environment.